

産地三河の贈答用小物の試作

稲垣三喜男 加藤 勝正 服部 金司

Trial of Small Souvenir from Mikawa

by

Mikio INAGAKI, Katumasa KATO and Kinji HATTORI

三河地区は窯業建材品を主製品とする陶磁器産地であるため、一般消費者をターゲットにした家庭用雑器としての陶製品がない。産地イメージの形成活動が積極的に取り組まれる中、産地三河のより一層のイメージアップを図るひとつの方策として、手土産品や記念品などいろいろな機会を通じて「三河のやきもの」をPRできる贈答用小物の開発が求められている。このため、産地三河のイメージ形成が容易で、かつ、固有技術を生かすことを開発コンセプトとして、現在、三河地区の窯業製品の中で最も知名度の高い瓦と、これまでの三河窯業史の中で歌舞伎役者を主体に土玩王国を築いたといわれる三河の土人形をモチーフにコースター、花器、貯金箱、爪楊枝入れ、ペン立て、小物入れ、土鈴などの贈答用小物のデザイン開発を行い試作品を作製した。

1. まえがき

三河地区は瓦、煉瓦、植木鉢等の陶磁器産地を形成し、特に、三州瓦は全国シェアの4割を占め日本一の生産量を誇っている。しかし、当地区は窯業建材品が主体の産地であるため、一般消費者をターゲットにした家庭用雑器としての陶製品がなく、産地イメージの形成活動が活発化する中、三河の特性を生かした贈答用品の開発が望まれている。

このため、産地三河のより一層のイメージアップを図るひとつの方策として、一般消費者を対象に手土産品や記念品などいろいろな機会を通じて「三河のやきもの」をPRできる贈答用小物のデザイン開発を行い試作品を作製した。

2. 開発コンセプトの検討

現在、陶磁器製の贈答用小物は、茶器、置物、花瓶、壁掛けなど多種多様な商品が市販され、価格、デザインも豊富である。したがって、この分野に新たに市場参入し、一定の市場を確保するには明確な開発コンセプトの基に類似商品との差別化を図る必要がある。

そこで、開発コンセプトとしては類似商品との差別化を図るのに有効な「産地三河のイメージ形成が容易」で、かつ、「固有技術を生かす」こととした。

具体的な開発テーマは、このコンセプトに最適な「三河のやきもの」を代表し、現在、三河地区の窯業製品の

中で最も知名度の高い瓦と、これまでの三河窯業史の中で歌舞伎役者を主体に土玩王国を築いたといわれる三河の土人形¹⁾とし、これをモチーフに贈答用小物のデザイン開発を行うこととした。

3. デザインの検討及び試作

3.1 瓦をモチーフにした贈答用小物

日本の屋根材として親しまれている瓦は、1400年という長い歴史を持ち、形や製法、使用箇所により分類され、色や形の異なる多種多様な瓦が作られている。三河地区で生産される瓦は、三州瓦として全国に普及し当産地のイメージを形成しており、産地イメージをアピールするモチーフとして最適である。

そこで、瓦のイメージを代表する棧瓦、鬼瓦などをモチーフにデザインの検討を行い、三州瓦と同様のいぶし窯でくんかし、絵具で加飾した試作品を作製した。

なお、試作に使用した素地は瓦用配合土で焼成温度は1120℃である。また、加飾に使用した絵具は、いぶしの色を変化させずに180℃で焼付けできるリキテックス・グロッシーズを用いた。

「コースター」

屋根に葺く最も数量の多い瓦である棧瓦の形をアレンジしたコースターをデザインした。コップのあたる中央部分に絵具で彩色し、モダンなイメージに加飾したものと、コルクを張り付け異素材との組み合わせにより変化を持たせた2種類を試作した (写真1)

「花器・貯金箱」

古代の宮殿や寺院の大棟の両端に据える魚の尾をかたどったといわれる沓型の飾り瓦である鷗尾をモチーフに花器と貯金箱をデザインした。いぶしの単調さを避けるため鱗部分を絵具で加飾し、花器としての用途だけでなくタバコ置きとしても利用できるよう背ひれ部分に穴を開け、鬼をモチーフにした灰皿と組み合わせ遊び心のあるテーブルウエアとした。(写真2-1、2)

「ペーパーウエイト・灰皿」

瓦のシンボリック的存在である鬼瓦の鬼をモチーフに笑顔や泣き顔の3種類のペーパーウエイトをデザインした。壁掛けとしても使用できるよう上部に穴を明け、目や外周部分などに絵具で彩色しアクセントとしたものと、金粉を擦り込みクラシックなイメージに加飾した2種類を試作した。灰皿はとこなめ焼協同組合製白3号土を用い、内側の鬼面部分だけに施釉し全体としては土味を生かしたものと、いぶしでくらかし外側面に線状に絵具を配した2種類を作製した。(写真3-1、2)

3.2 三河の土人形をモチーフにした贈答用小物

大形で色彩豊かな歌舞伎役者を特徴とする三河の土人形は、衣装罐の普及とともにその地位を奪われ、現在わずか数名が作っているだけである。素朴な味で庶民に親しまれ、碧南の棚尾、大浜、旭地区を中心に日本一の産地を形成し、土玩王国を築いたといわれる三河の土人形は、産地三河の土産品として最適なモチーフである。

そこで、三河の土人形を単に過去の産業文化としてとらえるのではなく、産地三河の新しい土産品としての再生をめざし、装飾品として飾るだけでなく生活の中で使って楽しめる実用的な機能を持つ贈答用小物を試作した。

なお、試作に使用した素地は瓦用配合土で焼成温度は900℃とした。また、絵付けは下地の白は水性ペイント、彩色は岩絵具とネオ・カラーを使用した。

「爪楊枝入れ・ペン立て・小物入れ」

忠臣蔵の名場面である松の廊下の浅野内匠頭と吉良上野介をモチーフに、爪楊枝入れ・ペン立て・小物入れをデザインした。三河の土人形の特徴である豊かな色彩を取り入れカラフルにまとめるとともに、より楽しい雰囲気演出するテーブルウエアとするため顔の表情に歌舞伎のイメージを強調した。(写真4)

「貯金箱」

高齢化社会を迎え、孫が祖父や祖母にお祝を贈る微笑ましい生活シーンを想定し、翁・媪をモチーフに貯金箱をデザインした。絵付けはセット物を強調するため翁と媪を一体ととらえ赤と黒の2色が両方の体を斜めに横切る大胆な配色とした。(写真5)

「ポプリ入れ」

生活の中で匂を楽しむ商品としてポプリケースがある。土人形に匂の機能を付加すれば、単に飾るだけでなく匂も楽しめる小物となる。そこで、ぼんぼり持ち娘をモチーフに匂の機能を付加したポプリ入れをデザインした。着物の紋様には碧南市の花である花菖蒲を配し、碧南市に訪れる観光客への土産品としても利用できるようにした。(写真6)

また、小さなスペースに飾り匂を楽しむミニのポプリ入れとして、松の廊下の吉良上野介をモチーフに大胆な色使いでまとめたポプリ入れを試作した。(写真7)

「土鈴」

鬼瓦の鬼をモチーフに土鈴をデザインした。赤と黒を基調に、斜めに白線を配したモダンなものと、片面は赤の下地に黒を、裏面は黒の下地に赤を擦り込み素朴でクラシックな鬼面の土鈴を試作した。(写真8)

4. まとめ

一般消費者を対象に産地三河のより一層のイメージアップを図るひとつの方策として、手土産品や記念品などいろいろな機会を通じて「三河のやきもの」をPRできる贈答用小物について、開発コンセプトの検討を行うとともに試作品を作製した。

開発コンセプトは、産地三河のイメージ形成が容易で、かつ、固有技術を生かすこととし、三河の窯業製品を代表し最も知名度の高い瓦と、三河窯業史の中で歌舞伎役者を主体に土玩王国を築いたといわれる三河の土人形をモチーフにデザインの検討を行い、以下の贈答用小物を試作した。

(1) 瓦をモチーフにした贈答用小物

産地の固有技術であるいぶしの技法を生かし、絵具による加飾や異素材と組み合わせた贈答用小物をデザインした。鷗尾をモチーフにした貯金箱や花器、鬼瓦の鬼をモチーフに笑顔や泣き顔をデザインしたペーパーウエイト、棧瓦の外形をアレンジしたコースターなどを試作した。

(2) 三河の土人形をモチーフにした贈答用小物

単に装飾品として飾るだけでなく、生活の中で使って楽しめる実用的な機能を持たせた三河の土人形をモチーフにした贈答用小物をデザインした。松の廊下の浅野内匠頭と吉良上野介の爪楊枝入れ、ペン立て、小物入れ、翁・媪の貯金箱、ぼんぼり持ち娘のポプリ入れなどを試作した。

文 献

- 1) 古谷哲之輔, 三河土人形, 日本雪だるまの会(1973).

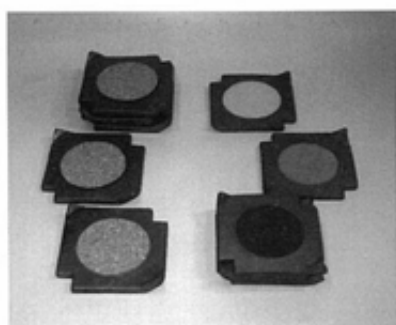


写真1 コースター
W80×D80mm

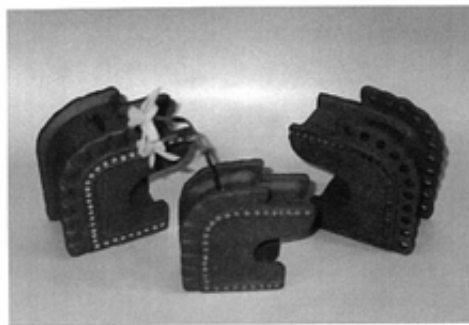


写真2-1 貯金箱&花器
貯金箱 W130×D75×H130mm
花器 大 W130×D75×H130mm
小 W120×D50×H120mm

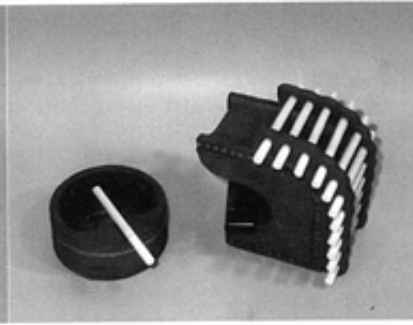


写真2-2 灰皿&タバコ置き



写真3-1 灰皿&ペーパーウエイト
灰皿 φ85×H45mm
ペーパーウエイト φ75×H25mm



写真3-2 ペーパーウエイト



写真6 ポプリ入れ
(ほんぼり持ち娘)
H270mm



写真4
爪楊枝入れ(浅野内匠頭) H145mm
小物入れ(吉良上野介) H105mm
ペン立て(浅野内匠頭) H145mm



写真7 ポプリ入れ(吉良上野介)
H105mm



写真5 貯金箱(翁・媼)
H140mm

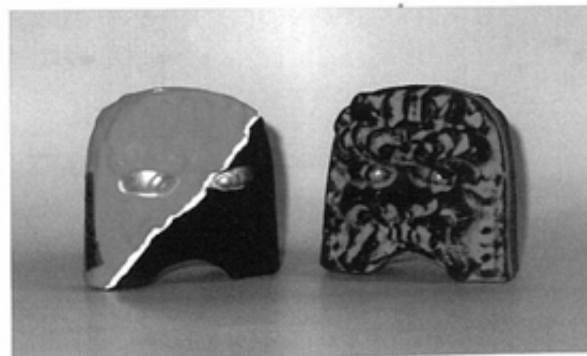


写真8 土鈴
H100mm